

## 36 「刺絡」の名称に関する考察

友部和弘・小曾戸 洋

北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部

演者らはこれまでに当学会ならびに日本東洋医学会において、刺絡に関する発表を重ねてきた。

ところで「刺絡」とは、いわゆる瀉血療法のこと、我が国独自の名称である。中国では「刺血」あるいは「放血」、また『内経』には「絡刺」などがある。では、いつの頃より瀉血の代名詞として「刺絡」という言葉が用いられるようになったのであろうか。これまで調査してきた上での認識では、おおそ荻野元凱『刺絡編』（一七七二）あたりから一般的に使われるようになり、三輪東朔『刺絡聞見録』（一八一七）など諸々の医書に散見されるようになったようである。

そこで今回は、『臨床針灸古典全書』（オリエント出版社、一九八八）に収録される、安土・桃山から江戸中期までに成立した医書を対象に調査することとした。

以下に瀉血の記述が見い出された書の、書名、成立年・条文を示す。

- ①『古今集針法』（一六一三頃）「心痛…鼻尖二及針ヲサシテ血ヲ出ス…」「月腫…眉ノマン中…曲沢…大椎…針ニテ血ヲ出セ」「痘疹…委中…血ヲ出ス」②『雲海士流之書』（一六〇七）「曲沢…血ヲ出スニ…手痛…」「頭痛…膈愈…青筋血ヲ出ス…」「立事ナラヌ人…合陽…可出血」③『広狭神俱集』（一八一九。本書は『針集』（一四六九〜八六頃）に石坂宗哲が校注を付したものの）「血を取る」「血を瀉す」「瀉血」「血を去る」④『扁鵲新流針書』（一六〇七頃）「中風…百会肩井曲池手ノ三里…血ヲ出ス…」「難産…手足ノ大指ノ内角ヲ三棊針ニテ一分刺ス也」「口中ノ事…病齒グキ…針ニテ刺シトヲシ…血ヲ取ル…強ク痛ムニハ…喉ノ内…血ヲトル」⑤『針科発揮』（一六八八頃）「出血」「絡刺者経言官針篇刺小絡之血脈也」⑥『針灸五蘊抄』（一七四五）「目疔少商出血…」「口舌生瘡…合谷甚則各取血」「咽喉腫痛…少商取血」（本書には上記ほか、四十数箇所の記述があり、いづれも「取血」とある。また大半が「甚則

取血」とあり激症に使われている) ⑦『針灸燈下余録』  
 (二七六九)「海泉：類經図翼云在舌下中央脈上主治消  
 渴針出血」〔金津玉液：舌下両傍ノ紫脈上針出血：〕⑧  
 『灸譜』(江戸中期)「百会：三稜針出血」〔尺沢：宜刺  
 是穴而出血：〕⑨『針学発蒙訓』(一七六二)「頭痛：  
 苦痛甚ハ三稜針ヲ以刺シ熱血ヲ去リ：朝鮮三稜針良」  
 ⑩『卷懐灸鏡』(二七六六)「尺沢：患疔瘡青筋針此穴  
 出黒血立愈：」⑪『日用之針法』(一六一三)「瘡毒：  
 尺沢：針ニテ血ダス」〔重舌：舌ノ下ニアシキ筋アリ針  
 ニテ血ヲダス〕⑫『杉山真伝流表之卷(異本)』(江戸  
 前期)「鹿門取血」「委中取血」「血絡刺 予按絡絡閉  
 塞須用砭針疏通」「舌瘡：手小指尖爪甲際表中取血立効  
 列血取血」「痘瘡：委中尺沢：以三稜針切其筋出血則：」  
 「乳蛾 十宣穴用三稜針取血甚妙也」⑬『主治針法』  
 (二六七七)「委中：コノケツ針サシテ血ヲトルコトヲ  
 主トル」⑭『十四經穴治法』(二六八四)「委中：大風  
 髮眉墮落ニ刺之血ヲ出シテ髮出ス」⑮『合類針奇貨』  
 (二六七九)「重舌ノ下両辺紫筋ヨリ血ヲイダス」⑯  
 『針灸要歌集』(一六九三)「砭針ハ：月腫ノ血ヲ取ル

時、ケンベキノ血ヲトル：。邪氣アツマリテ、痛ミヲ  
 ナス時、此針ヲ刺テ血ヲ抜也奇驗アリ」

以上のような条文が得られた。瀉血治療を示す言葉  
 としては「血ヲ出ス」「出血」「血を取る」「血を瀉す」  
 「瀉血」「血を去る」「三稜針ニテ刺ス」「取血」など  
 あり「刺絡」の文字はみられなかった。一方、当療法  
 を『内経』では「絡刺」、また杉山流においては「血絡  
 刺」としている。当然、今回の調査をもって結論付け  
 られることではない。しかしながら「刺絡」という日  
 本独自の名称については、一応、考察を加えておく必  
 要があろう。今後の刺絡関連の調査においても本件に  
 ついては常に注目していきたい。